

中経論壇

経営支援NPOクラブ理事
吉田 仁



若いころ、「幾山河越え去り行かば」と歌った牧水に憧れて、見知らぬ土地に想いを馳(は)せたものである。風光明媚(めいび)な場所に立つた時の感動も旅の楽しみの一つであるが、歳(とし)いってから

る。それは思いがけないポスターのようなものである。訪れた人に、そうした伝統文化をわかりやすく伝えてくれるものとして、優れたデザインがある。

は、地域の伝統文化に触れ、その伝統を生んだ人々の暮らしや人情を知ることに興味が移っている。

NPO活動の中で知り合った、新進気鋭の空間デザイナーに、株式会社策卜術の高木久美社長がいる。策卜術という社名には、デザインに必要な要素としてのコンセプトとそれを表現するテクニックの二つが込められている。大手建設会社の社員に対し、空間デザイナーの講義も行っている高木社長は、デザインするにあたって、地域の伝統文化を作品に取り入れ、訪れる人に風土や風習を理解し共感して

観光資源としての伝統文化

もらえようという心掛け
しているという。

同氏は、白川郷に最近オープンした「御宿結の庄」のフロントのデザインを手掛けたが、作品コンセプトは、白川郷で育まれてきた相互扶助の心「結」である。モチーフとして、合掌造りの民家を建てるときに行われる、石場力子という礎石を打つ作業の場面の絵を使った。配置にあたっては、その場面を3段階構成にし、合掌造り民家の窓から眺めた風景という趣向にした。そこには、白川郷に生きる人々の支え合いや深い絆を、宿泊する旅行者に感じてほしいという高木社長の強い

思いが表れている。

白川郷が世界遺産になったのは、その特徴ある合掌造りが、後世に伝えるべき建築様式として評価されたものと思われるが、厳しい自然環境の中で、それを生み出した人々の絆こそが、伝えられるべき伝統文化であると思う。礎石を打つ手伝いに集まった老若男女の表情を見ながら、そうした連帯を生んだ背景は何だったのかと思いをめぐらすのも、私にとって大きな旅の楽しみである。

観光立国を目指す日本で、外国人旅行者に日本の伝統文化に触れてもらい、共感を得られることが、相互理解の基本である。観光資源とは、景色や神社・仏閣だけでなく、地域に息づく伝統文化も資源になりうる。それには、デザイナーの力が必要である。伝統がデザインによって見える形となり、旅行者にその地に息づく文化を理解してもらい、とができるならば、それは観光立国の望ましい姿と言えよう。

「結」の心を伝えるデザイン